日本語学習者の学習環境について

—大学で学ぶ学習者の場合—

A Survey of JSL Learning Environments: 11 Cases of Foreign Students at the University Level

大城朋子・尚真貴子・金城尚美・上原明子

1．研究の背景

日本語学習者の場合、「学習」は、日本語の教室や交流事業のような「教育的空間」において生じうる（高木　2003）。しかし問題なのは、学習はよく構造化され、あいまいさを持たない空間、すなわち「教育的空間」のなかでこそ最適に展開すると考えられている（高木　2003）点ではないだろうか。多文化的な状況においては、学習とは、教室のような「教育的空間」のみに限定せず、日々繰り返される人々の関係構築の営みや物理的な物との接触等、生活の営み全体を「学習」と捉える視点が重要である。状況的学習理論や社会文化的アプローチを基盤とする社会的文脈を重視した日本語教育（西口　2002）では、日本語を学んだ後に社会に参加するというよりも、むしろ、日常の実践への参加を通して日本語を学ぶと考えている。この「参加による学び」は、すなわち、日常生活の中で環境との相互作用を通して学ぶ（林　2003）という考え方である。

日本語の学習者の数が増え、またそのニーズが多様化してきている現在、社会にとって本当に必要な理念、内容、形式をもった日本語教育をそれぞれの学習者の状況と照らし合わせて、一つひとつ作っていくことが求められている（山田　2003）。そのため、日本語教育を考える場合、学習者を彼らが置かれている文脈から切り離して抽象的または一般的に捉えることは、本質を見誤る危険性があり、学習者個々の事例とその背景にある文脈も併せて考えることが必要だ（前掲）ということが認識され始めている。このような考えに基づき、近年、教師の役割に関して、「『教える』よりも、学習者一人ひとりのあり方を尊重しながら、『皆が学べる相互作用的な環境』を提供しようという方向」（西口　2003）に日本語教育者の発想が転換し、社会との関わりにおいて教育を編成するという新たな視点から、教育を捉え直す方向へ向かい始めている。

このような日本語教育のあり方や日本語教師の役割に対する考え方や学習と学習者の捉え方を背景に、「教室に教師と学習者がいて教材があり学習活動が行われるという従来の

枠組みで多様な学習を論じる」（下平他　2004）だけでは不十分であるという認識が生まれ、学習者一人ひとりの学習環境へ目を向ける調査や研究が行われている。学習環境の問題は、教室や教育機関の設備や施設等の整備の問題だけでなく、教室の外部にかなりの広がりを持っている（林　2003）と予想される。

このような背景から筆者らは、学習者一人ひとりによって異なる環境の多様性を把握するという調査が必要であると考えた。林（2003）の指摘を基に、教師の役割という観点から学習者と学習環境の相互作用を調査する意義をまとめると次のようになる。

（1）学習者と学習環境の実態を把握することで、他の学習者が各自の環境を積極的に利用するヒントを与えたり、その取り組みに繋がるような教室活動を試みたりすることを可能にする。
（2）学習者自らが各々の環境を活用したり、よりよい環境となるよう働きかけたりする自律的な力を育成する指導を行うことができるようになる。
（3）教師や仲間の学習者がお互いに支援していく場として教室を位置付けるよう配慮することができるようになる。
（4）学習者の社会生活全体の中に日本語や日本語学習がどのように位置付けられているのかを意識し、学習環境のデザインや整備を行うことが可能になる。
（5）日本語教育全体という広い視点から捉え、環境として日本社会を考える目を養うことや、日本人の側へ学習者に関する情報を提供すること、学習者に対する周囲の理解の促進といった働きかけをしていくことが可能になる。

以上のような研究の背景と意義を踏まえ、学習環境として学習者が接触して学習を生起させるリソースを、人的なリソース（対人環境）と物的なリソース（非対人環境）として把握する調査を行った[1]。

2．先行研究

多様な背景や性質を持った日本語学習者の学習の場も様々であり、学習環境も多様である（林　2005）。大学の日本語の授業を受講している学習者は、教室の外では実際にはどのように生活しているのか、どのような人と接点を持ち、どのような物を学習の道具としているのだろうか。このような点について、これまでの研究はニーズ調査という名目で調べられ、学習者全体を一つのグループとして捉え、ニーズの高いものを明確にし、シラバスや教材作成等を通して教育に還元するという趣旨のものであった。また、日本語の教室を出た後、つまり教室外での人的リソースならびに物的リソースの接触場面における言語

習得や文化習得に関心が高まってはいるものの、量的なデータ収集に基づく研究が多く、一人ひとりの学習者に焦点を絞ったものは、わずかである。

教室外での学習の重要性を認識した文野（2004）は、日本語学習者と環境の相互作用を探る調査を実施し、報告している。その調査資料を日本語学習に役立っているものという観点から分析した浜田（2004）は、学習者の日本語力が初級から中級、上級へと向上するにつれ、教育領域から交友領域・日常生活領域へ変化する傾向があると述べている。しかし、日本語学習に役立つと思うもの（ほしいもの）としては、上級になるほど、教科書や辞書など教育領域に属すると見なせるものが増えており、日本語力が身に付いてくると却って、教育領域の学習リソースの重要性が再認識されるのではないかと分析している（浜田2004）。

さらに林（2004）は、インプットと社会参加という観点から、テレビとの接触について分析し、①初級レベルの学習者では、テレビの視聴は日本語学習者にとって役立つものとして必ずしも強く意識されているとは限らないこと、②中級レベルの学習者では、テレビを日本語学習のためのインプットの道具として意識し始め、聴解力がつき、語彙が増えると感じると同時に情報を得、考え方の違いを感じるなど日本語学習を超えた広い意味での文化や社会情勢への関心を満たす社会参加を促すものになっていること、③上級レベルの学習者では、テレビを見ないと社会から取り残された感じがしてくるという感覚が湧くほどテレビを通して得た情報を基に、社会と接点を持つことの意味を感じていること等を見出している。

一方、宮崎（2004）は、日本語学習者の交流相手について分析した結果を報告している。その報告によると、調査対象者（延べ36人）の交流相手は、日本語母語話者が43．5%、日本語非母語話者が56．5%と、非日本語母語話者との交流が多いということであった。また交流相手は友人が群を抜いて多く挙がったという。さらに交流によって日本語が上手になると感じるかについては、「大変上手になる」と感じられる相手として87．3%が日本語母語話者が挙げられており、日本語だけあるいは日本語と外国語を使って交流していることがわかった。その上手になると感じられる交流相手の大多数が、程度の差はあるものの「心の支えである」と捉えられていることも明らかになっている。これらの結果から宮崎（前掲）は、交流相手との間に対等と言えないまでも権力関係ではない人間関係が構築でき、積極的に会話ができる場合に自然と学びが起こり、それが「日本語が上手になる」と意識させる要因になっていると述べている。

沖縄での調査として、富谷他（1999）がある。日常生活言語を既に獲得している日系人子弟を対象に、学校内外でどのような言語生活、自己学習が行われているのか、どのよう

な言語環境の下でどのようなリソースを活用しているのか等を明らかにすることを目的に行なわれたケース・スタディである。２人の中学生を対象とした調査の結果、身の回りに利用可能な教材が豊富にあり、それを利用できる環境で生活している場合であっても、自己学習を進めていくことは容易でないという事例が報告されている。しかしながら、県内の大学で学ぶ留学生を対象としたこの種の研究は、ほとんどなされていないのが現状である。

３．調査の概要

本研究グループでは、大学で学ぶ日本語学習者を対象に調査を実施した。対象者を選定するにあたり、それぞれの大学で次のような観点から抽出した。まず、第１次調査（平成15年度）においては、琉球大学では、奨学金をもらっておりアルバイトをしていない留学生で、留学生グループとの接触の多い学生とサークル活動などを通して日本人学生との交流の多い学生を選んだ。沖縄国際大学においては、沖縄に家族や親戚が滞在し、その関係からアルバイトをしたり、交友関係を結んだりしている学生を調査した。沖縄キリスト教短期大学では、自律的な学習者だと判断される留学生を調査した。さらに第２次調査（平成16年度）においては、配偶者または結婚を前提とした相手が沖縄にいる学習者を対象とした。このように多様な背景を持つ学習者を選んだのは、広く学習環境を捉えるという理由からであった。調査対象者の背景情報は、表１（第１次調査）と表２（第２次調査）に示した通りである。

調査は、文野（2004）の調査で用いられた調査票をもとに半構造化インタビューを実施した。そのインタビューの内容は、①背景情報を問う質問、②対人環境について問う質問、③非対人環境について問う質問、④沖縄という学習環境について問う質問の４つの部分から構成されており、その他は学習者に合わせて適宜質問するという半構造的なものであった。背景情報に関しては、出身地や滞在年数、同居家族の有無、来日目的等を尋ねた。対人環境については、この１ヶ月間でよく接した人物を５人または５グループまで（複数の人を１グループとした場合）挙げてもらった。一方、非対人環境については、テレビ、新聞、雑誌、日本語の教材等の学習メディアに関して使用頻度等を質問した。対人環境及び非対人環境に関しては、「日本語が上手になると感じるか」、「日本文化・習慣の知識が増えるか」、「心の支えになっているか」等の質問に対し、「大変上手になる」、「まあ上手になる」、「日本語とは関係ない」、「上手になるのをじゃまする」等の４段階評価をしてもらい、その理由を尋ねた。また、「現在はないが、あれば日本語の習得や日本文化・習慣を知るのに役立つものは何か（誰か）」という質問も行った。

以上の質問項目に加えて、「沖縄で学ぶメリットとデメリット」、「沖縄という環境を生かしているか」、「将来の希望」についても尋ねたが、これらの付加的な質問は文野（2004）の調査内容と異なる点となっている。

調査は、本研究グループのメンバーが所属する各々の大学で実施した。実施時期は第1次調査が平成15年3月から5月にかけて、第2次調査が平成16年11月から平成17年1月にかけてであった。インタビューは、調査者がそれぞれ対象とした学生に一対一で行い、インタビュー内容についてはメモをとると同時に、対象者の許可を得た上でテープに録音した。

表1　第1次調査の対象者の背景情報

学習者	年齢	出身地と来日前の身分	滞在年数	同居家族	趣味	学習動機と来日目的	日本語レベル	備考
no.001 I・O（女）	20代後半	南米 日本語教師	1年5ヶ月	なし	なし	自分のルーツを考えるため。日本語・日本文化を学ぶため。	中級	1年間の県費留学生
no.002 O・P（女）	20代前半	アジア 母国の大学 日本文学科在籍中	12ヶ月	なし	音楽（三線と歌）	日本のアニメがきっかけ。通訳・翻訳家志望	中上級	1年間の県費留学生
no.003 U・I（男）	20代後半	アジア スポーツ選手	2年6ヶ月	配偶者と義理の妹	スポーツ、音楽	外国語ができた方がいいから。	初級（読み書き中級）	学部4年次
no.004 S・O（男）	20代前半	アジア 高校生	2年6ヶ月	従兄弟、叔父・叔母	沖縄の方言、外国語、ビリヤード	日本文化に興味がある。英語と日本語の教師志望	中級初め（読み書き初級）	永住希望。大学進学希望。
no.005 M・P（男）	20代前半	アジア 高校生	3年1ヶ月	祖父母	釣り	大学で学問を修めるため。日本にいる家族と話したいため。	上級	学部2年次
no.006 P・A（女）	20代後半	ヨーロッパ 母国の大学の学生	10ヶ月	友達	言語学、読書、外国語	通訳志望	中上級	現英語教師（ＡＬＴ）
no.007 G・G（男）	20代前半	アジア 日本語学校の学生	2年9ヶ月	友達	バレーボール、バーベル、読書	日本語教師志望	中級	菊栽培農家で仕事

表2　第2次調査の対象者の背景情報

学習者	年齢	出身地と来日前の身分	滞在年数	同居家族	趣味	学習動機と来日目的	日本語レベル	備考
no.008 N・T（女）	40代	アジア サービス業従事	16年	配偶者と子供3人、姉の6人家族	スポーツ	日本人と結婚するため来日。運転免許の筆記試験を受けるため日本語を学びたいと思った。	中級	科目等履修生

no.009 M・O (女)	20代	アジア 高校生	3年 1ヵ月	配偶者と子供1人の3人家族	映画鑑賞	配偶者(日本人)の帰国の際に、共に来日。日本語学習を以前から希望していた。子供のためにも日本語の文字が読みたいと思った。	中級	学部2年次
no.010 Q・C (男)	20代 前半	ヨーロッパ 日本語学校の学生	2年 5ヵ月	ガールフレンド	侍に関する読書、侍フィギュア集め、侍ビデオ録画収集	日本語・日本文化を学ぶため。11歳で柔道、15歳で空手を習う。日本文化に深く興味を持つようになり日本人の精神、心を知りたいと思うようになった。	中級	学部1年次
no.011 U・K (男)	20代	アジア 母国の大学の学生	6ヶ月	なし	スポーツ (筋トレ)	日本人の恋人と結婚するため滞日。外国語に関心があり、日・英・自国語を自在に使えるようになりたかった。	中級	学部1年次

4．調査結果

4.1　学習者をとりまく学習環境の実態

表1と表2の11人の学習者の対人環境と非対人環境に関わる学習環境を中心に調査を行った。各学習者の調査結果を表3にまとめる。表3は、表1と表2の順番に準じている。

表3　学習者をとりまく学習環境

学習者	調査結果
no.001 I・O (女)	1）対人環境 I・Oは奨学金を受け学内の寮に住んでいる。寮の同じユニットの仲間と親しく、一緒に食事の用意をして食べたり、テレビを見たりする。その中にはチューターをしてくれている学生もいる。日本語で話すので日本語の上達にもまあまあ繋がっていると捉えている。特にチューターは優しく接してくれ勉学や生活のサポートをしてくれるだけでなく、良くないことは指摘し厳しいこともはっきり言ってくれるのでありがたいと感じている。

ユニットの仲間は急病になっても一人ではないという安心感を与えている。一方、学内の芸能サークルに所属し三味線と歌の練習を通して部員達と親密な関係を築いている。日本語で接するため日本語の上達と繋がっていると同時に、先輩と後輩の関係や部員達の言動が日本人の言語行動・文化を理解するのに役立っていると感じている。先輩が相談にのってくれたり、練習が上手くいかない時には部員仲間が励ましてくれたり、心の支えとして大きな存在になっている。留学生の友人として、同じ奨学金を受けている２人のクラスメートがいる。毎日彼女等と接しているが、共通言語が日本語のため、彼女達との付き合いが日本語の習得にも役立っていると捉えている。日本文化や知識の習得には寄与していないが、何でも話せ、何かあれば助けてくれる存在として心の支えであると感じている。日本人、外国人を問わず、親しい友人達は心の支えとして彼女の精神的な安定に寄与していると言える。

２）非対人環境

テレビ番組はドラマやバラエティを中心に視聴し、字幕スーパーが大きな理解の助けになると述べている。テレビの視聴により語彙が増え、聴解力が高まると感じている。日本文化や習慣についての知識もある程度身に付けられると捉えている。朝、目覚めたら、すぐにテレビのスイッチを入れるようだが、寂しさをまぎらわすためであり、まあまあ心の支えとなっていると感じている。新聞には週に２～３回目を通し、主に１面やコラム、テレビ欄に目を通すようにしている。会話で使用しない語彙や表現、文体を学ぶ材料として大変役立つと認識している。電子辞書も頻繁に使っている。

３）考察

I·0の行動範囲は大学の中と限られているが、日本人学生との付き合いが多く、またその付き合いは深いことが特徴として挙げられる。彼女は自国の大学で日本語を専攻しているが、日本語を話す機会には恵まれていなかったようだ。そのためか来沖当初は、文法力や語彙力等の知識面では優れていたが、発話力は比較的低いほうであった。しかし留学期間の1年の間にコミュニケーション能力がかなり高まったと評価できることから、日

	本人学生や留学生仲間との日本語による交流が大きく関わっていたと推測される。日本語学習のためには、間違った表現や話し方、発音等を指摘してくれる人がいいと考えているため、友人のみならず、教師の存在や授業も重視している。また心の支えとしては、友人達が最も大きな存在だったようであるが、「彼氏」がいれば、一段と日本語の習得が進むのではないかと考えていることもわかった。
no.002 O・P (女)	1）対人環境 奨学金を授与されバイトをする必要がないO·Pは住まいも学内寮のため、生活の範囲は限られている。彼女と同じく沖縄県から奨学金を得ている留学生仲間（3人）と特に親しく付き合っており、家族のようだと感じるほどである。またクラスメートで同国出身の女子学生とも親しく、お互いに良い相談相手として信頼関係がある。彼等は心の支えとして大きな存在だが、母語等の使用が多く日本語学習という観点ではプラスの存在にはなっていない。彼女の学習のサポートとして大きな割合を占めるのは日本人チューターである。チューターはO·Pの母語が話せるが、日本語を使用するよう努めてくれるため、日本語の上達に大変重要な存在だと認識されている。また生活上のサポートや助言もしてくれるチューターを心から信頼し精神的な支えにもなっていると感じている。さらに月に一度程度しか会えないが、親戚の女性がいる。母語を主に使用するため日本語の学習には結びつかないが、自分は一人ではないという安心感を与えてくれる存在になっている。さらに同じ奨学金をもらっているある留学生と、同じ仏語の授業を受講したことをきっかけに親しくなった。彼は日本語力もあり知識や話題が豊富なため、日本語の上達にも関わる存在であり文化的なことが学べると感じている。このようにO·Pの交友関係は留学生仲間やチューターが主で、広がりは少なく日本語学習には直接結びついていない。その反面、母語によるネットワークにより精神的には安定している様子がうかがえる。 2）非対人環境 ほぼ毎日テレビでドラマ、バラエティー、天気予報などの番組を視聴しており、わからないことばはメモをして辞書を引き、日本語の学習手段に

	もなっている。またドラマでは日本人の言語行動や習慣等が学べると感じている。テレビはストレスの発散にはなるが心の支えとは関係ないと捉えている。新聞に付いている折り込み広告によく目を通し、季節ごとに特徴が現れるため（例えば、ひな祭りが近いと関連した商品が売られる、お中元やお歳暮の時期の商品紹介がある等）日本文化について学べる媒体として意識している。辞書は母国語と日本語に対応した辞書の他にも国語辞書やことわざ辞書等をよく利用し学習に役立てている。カラオケには月に1度程度のペースで行っており、歌詞が漢字学習に役立っていると感じている。 3）考察 O·Pは日本語母語話者との接触量が多いことが日本語や日本文化・習慣の習得に繋がるというビリーフを持っているが、実際には留学生仲間と接する時間が長い。年齢が高いという心理的なフィルターが日本人学生と接触を避ける要因となっている。日本語や日本文化に役立つものとして、お金を挙げている。日本各地を旅行しながら日本人と接したり文化を体験したりすることができるという発想である。また日本人の「彼氏」がいれば、日本語の習得が進むのではないかと考えている。心の支えとして「沖縄の海、沖縄の食べ物」を挙げているが、県系人としてのルーツやノスタルジアがそこにはあり、大きな支えとなっている。
no.003 U・I （男）	1）対人環境について U·Iは配偶者とその妹と同居していて、大学以外の環境では母語を使用する機会が多い。しかし、配偶者のほうが先に沖縄に来て日本語を流暢に話すことができるため、日本語の間違いを直してくれたり、日本語に関することの手伝いをしてくれたりする。配偶者がいることで安心するし、相談できるから心の支えになっている。またゼミの指導教員は、卒論を丁寧に指導してくれるばかりではなく、親身になって生活面での悩みも聞いてくれるので、話していて安心するため大変心の支えになっている。ゼミの友人や同じ科目を履修している友人とは大学内だけの付き合いで内容も授業や卒論のことがほとんどである。アルバイト先の店長とは職場内で会っ

	て話す程度であるが、話すときは日本語だけなので、日本語の勉強にもなり、大変役に立つ人だと思っている。 2）非対人環境 テレビは毎日ニュース番組を視聴している。テレビを見ることによって日本語を聴く力が付くと述べているが、アルバイトで忙しいためニュースを見る時間しかないとのことである。また日本の新聞や雑誌は難しいという理由もあるが、何よりも時間がないという理由からあまり活用していない。4年次なので卒論関係の本を読んだり、辞書を毎日使用したりしている。また、教科書を使って勉強することは自分の都合で活用できるので便利な上、日本語が大変上手になると感じている。時間がないため、インターネット、メール等はしないようである。 3）考察 U·Iは、時間も余裕もなく生活環境も整っていない中で学習している。常に生活への不安を抱え、ひたすら大学の授業とアルバイトだけの生活である。さらに配偶者とその妹と同居することにより、家族を支えなければならないという責任の重さからくる重圧もあるようだ。心の支えとして何でも話し合える対人関係を持ちたいという願望はあるが、そのために割かれる時間的・経済的・精神的なデメリットの方が大きいと捉えている。インタビューをすることによって言葉も通じない異文化の環境下での生活と学習の狭間に苦しんでいるU·Iの状況がよくわかった。
no.004 S・O （男）	1）対人環境について S·Oは、沖縄で衣料品店を経営している叔父の家で生活している。従って日常生活では母国語を使用しているため、日本語の上達はそれほどではないが、叔父と叔母が母国のことは当然であるが、日本や沖縄の文化、習慣についてもよく教えてくれるので知識面での学習の機会に恵まれている。従兄弟は、日本語が上手で年齢も近いことから、S·Oの会話力はそこで身に付いたと言える。家族同様の環境なので大変心の支えになっている。また、S·Oは、来沖してから叔父の経営する衣料品店の手伝いをし、同年代の店のスタッフとは、日本語と地域共通語を使用し、仕事の話をはじめ、

沖縄の文化、料理、その他いろいろな話をし、困った時には手伝ってもらったりする（例えば、客との会話がうまくいかなくなった時等）。同年代なので共通の趣味や興味があり、一緒に遊びに行ったりして、日本語の上達の面でも精神的な面でも大変役に立つ友人である。さらに、お店に来る客に日本語で応対をすることによって「話す」、「聴く」能力も付いてくる。お店の客とは、ファッションのこと、他府県と沖縄の違い、沖縄の文化や方言について話す等、会話の内容は幅広い。接客する時には「敬語」を使用しなければならないことも学び、それをきっかけに「敬語」への興味も湧いてきている。また、大学での友人とも積極的に日本語を使用して語学力の向上に努めようとしている。

２）非対人環境

サテライトでアメリカや自国の放送も時々視聴しているが、日本のテレビは毎日視聴している。特にＮＨＫ教育番組、旅行番組やドキュメンタリーで母国のことが紹介されたり、また他のさまざまな国の文化等も知ることができるので大変いいと述べている。また、テレビからは情報もたくさん入手できるので日本語も上達するという。仕事の関係上、ファッション雑誌やその他の若者向けの雑誌等も社会勉強のために読んでいる。インターネットは利用しているが、使用言語は英語である。しかし携帯のメールは、日本語を使用するように努力しているようである。

３）考察

S·0は、非常にバランスの取れた学習者で、家族と共に暮らし、精神的にも経済的にも安定している。インタビューの中でS·0が効果的な日本語習得方法として感じている点を幾つか述べた。まず一つに「わからなくてもたくさん聴くこと」、そうすれば、だんだんわかるようになるという。次いで、「恥ずかしがらずに何でも話すことも大切である」と述べている。日本人の彼女を作ったら日本語が上手になるが、S·0は仏教徒であるため辞書が恋人のようなものだと述べていた。常に英語と日本語の辞書を持っていて、勉強したことやわからないことがあるとその都度メモに書いてポケットに入れている。学びたい時にそれを見せると、相手は親切に教えようとする。学習者がやりたいという態度や気持ちを見せたら相手は必ず教

	えたいという気持ちになるという。さらに、新しい言語を学ぼうとする時、難しいかもしれないが母語を忘れてその新しい言語で考えなければならないということ、つまり「目標言語で考える」ということをS·Oは日本語を習得する過程で気づいている。学校での授業も大切だが、「日本人と遊びに行くこと」、「日本文化を取り入れた勉強をすること」等、実際に経験してみないとわからないことはたくさんあるから、積極的に学ぶことが大事であると述べている。自分のアイデンティティがしっかり家族によって支えられ、日本人との広がりのある交友関係、そして地域行事への参加等、バランスの取れた日常の環境が日本語学習をサポートしている。
no.005 M·P (男)	1）対人環境 M·Pは「祖父」と呼んでいる人物と同居している。実際は祖母の兄弟であるが、祖父は沖縄の女性と婚姻をしたことにより（「祖母」と呼んでいる）生活基盤（会社経営）を沖縄に持っている。祖父はM·Pに母国語で話すことはなく、親代わりとして説教をしたりする厳しい人物である。しかし、母国文化との相違点等を教えてくれる父親のような存在で、M·Pは尊敬している。「祖母」に関しては、一緒に過ごす時間が長く食事の世話、そして、日本語や日本人の考え方や習慣等まで教えてくれ、何でも話せる人物であると評価している。この二人が彼の学習環境の中で最も重要な人物となっている。また、M·Pには10歳～15歳も年上の、漁師の兄弟である親友達が近所にいて、家族で親しくしている。会う時には、天気や釣りのテクニック等に関する話題が主で、そこに大きな喜びを見出しているようであり、また、必要な時には助けてくれるという信頼感を抱いている。同じ趣味や興味を持つ仲間であるということ、そして、家族ぐるみの親交だということに安心感を覚えているようである。また、兄弟は、「方言を教えてくれる」と述べ、地域方言に関してプラスに評価していることから、M·Pの社会言語文化能力の伸長にも一役買っている。M·Pは、大学内で話す日本人学生達を、M·Pの母国語を学びたいために交流室にやって来るのだと言う。同世代なので話しやすく、日本語が上手になり、日本の文化や習慣、そして日本人の考え方等が学べると評価している。同国人留学生達と

	は母国語で話せるからほっとするが、皆、学業やアルバイトに忙しいため学校以外での交流はない。そこには、同国人と母国語で話すことが日本語学習を阻害するという意識も働いているようであり、同国人留学生達との親交の優先順位は高くない。 ２）非対人環境 テレビと新聞は日本語学習に役立ち、日本の文化や習慣に関する知識が増えるとしている。また、新聞やＮＨＫのテレビ放送には大きな信頼を寄せていて、それらの文章や用語の正確さを高く評価している。市販の本への信用度は低い。理由は、書かれていることが正しいかどうか分からないからというものである。M·Pは自分にとって好ましい非対人環境に関する基準を持っているようである。 ３）考察 血の繋がりを持つ家族との同居や、家族からの学資援助のお陰でアルバイトをしなくても良いという経済的に安定した環境の中で、精神的にも非常に落着いている。家族から広がる人間関係の中で安心して繋がりを結んでいるが、大学における同年代の対人環境においては時間外の繋がりはない。それは、彼自身の価値基準や規範が影響しているようである。
no.006 P·A (女)	１）対人環境 P·Aは、対人環境に広がりを持っている。特に、ルームメイトの留学生とは、日本語学校卒業後、進学先も同じ大学ということもあり、共通の問題を理解し合える心の支えとして大きな存在になっている。二人の共通言語が日本語であることで、日本語力の向上に大いに役立っているという。ボーイフレンドとは、月に１回程度、食事をする関係で、もっぱら英語で話し、日本語の上達や知識等には関係ないが、心の休まる相手であるという。また、元日本語学校でのチューターだった日本人の友人は、現在、同じ英語学校の同僚で、仕事のことからプライベートなことまで話せ、日本社会についてもアドバイスをしてくれる大事な存在である。仕事先のマネージャーからは、仕事のやり方や人間関係についてのアドバイスをもらえるので、大変役に立つ人物であると認識している。現在アメリカに住んでい

	るP·Aの母親も、常に応援してくれる存在として、留学生活の大きな心の支えとなっている。 2）非対人環境 テレビ視聴に関しては、週に3回から4回、ニュースやバラエティ、ドラマ、映画等を視聴している。テレビ視聴は、日本語上達に大変役立つと考えている。特に、聴く力の養成になると考えているようである。その一方で、テレビはアドバイザーではないという認識から、テレビを見ることが心の支えになるとは考えていない。 3）考察 P·Aの来日後の精神的なゆとりは、母国の大学で培った高い日本語力と英語力によるものと思われる。また、小学校でのＡＬＴの仕事を通した子供達や同僚との触れ合い、明確な将来計画を持っていること等も、P·Aの留学生活に大変有効に働いているようである。
no.007 G·G (男)	1）対人環境 G·Gの対人環境には、それほど広がりは見られないが、大学内にキーパーソン的な存在の日本人の友人がいることが、大きな支えとなっているようである。彼とは、大学のクラスでのグループワークを通じて親交が深まり、クラス終了後も交流が続いているということである。日本語学習や日本文化の習得に関してのチューター役から、プライベートでの遊び仲間としても、G·Gの留学生活にとって大切な友人である。その他の日本人学生とは、キャンパス内の喫煙場所で、ちょっとした雑談をする程度の関係だが、彼等と話すことは、ナチュラルスピードでの日本語の聴き取りのトレーニングになると考えているようである。同国人の友人の中では、母国の日本語学校からの友人で、沖縄に来てからもその友情が続いている男性を、共にいることでリラックスできる存在であると感じている。また彼からは、方言や琉球民謡等を教えてもらえるため、文化的知識を増やすために有効であるともいう。来日してから交流の始まった同国人の友人も、同じ境遇にいる存在として共感を覚え、心の支えになっているようである。 2）非対人環境

	テレビ視聴やＣＤを積極的に活用している。特に、ドキュメンタリー番組やニュース、天気予報を視聴することで、日本語が大変上手になると考えている。テレビ視聴の際は、わからないことはメモに取り、後で調べる等、日本語学習に積極的に活用している。また、眠れない時の心の支えにもなっているようである。雑誌については、大学の図書館で『日本語ジャーナル(英訳付)』を読んでいる。文化的な内容の記事を読むことで、文化的な知識が増えると認識している。また、『日本語ジャーナル』の付属ＣＤを毎日聴いており、漢字力の低いG·Gにとって、耳から読み方を習得できることは、大切なことであるという。 ３）考察 G·Gには、大学生活の心の支えになる友人と、今回の調査には該当しなかった[(2)]が、家族ぐるみで付き合える知人の存在が、留学生活を支えていることがわかった。また、日本語学習における非対人環境の活用の仕方に、G·Gの日本語学習に対する強い意志を感じる。このことは、同国人留学生の中でも群を抜いて成績が高いことにも反映されている。将来、日本語教師になりたいという目標を持っていることも、日々の留学生活にプラスに作用しているのかもしれない。
no.008 N·T (女)	１）対人環境 日本人と結婚し３人の子供を持つN·Tは、滞日年数も16年と長期にわたる。飲食店の経営をしているが、経営者として従業員にリーダーシップを発揮するため、また接客のため、さらに出身国について正しい知識を普及したいという動機で、科目等履修生として日本語を学び始めた。彼女が日常的に接しているのは、家族である。店の調理師をしているご主人、国から呼び寄せた実姉（店の手伝い）、そして、子供達である。その他、通訳ボランティアを通して知り合った外国人の友人はいろいろと相談にのってくれる頼もしい存在である。またカービングの教師をしている日本人女性はご主人の交友関係を通して知り合い、子供のこと等を話せるほど親しくなっている。また夫の両親、近所の飲み屋のママ等とよく接し、地域社会の一員として根をおろして生活している様子がうかがえる。さらに地域生

	活者として自然に方言が耳に入る環境にいるため、相手によっては方言の語彙をまぜて話すこともあり、地域に溶け込むための一つのストラテジーとして臨機応変に活用している。心の支えとして大きな存在は夫と子供達である。 2）非対人環境 日本語学習のために最も役立つ媒体として、テレビを挙げている。ニュースを中心にほぼ毎日視聴し、わからない言葉は辞書を引いている。字幕スーパー付きのテレビ番組は理解しやすいし漢字力も付くと考えている。また番組によっては日本文化も学べると考えている。新聞は地方紙の見出しを中心に、ほぼ毎日、目を通すよう心がけている。特に地域の記事は沖縄に関する知識が学べると感じている。その他、教科書に準拠したテープやＣＤ、ラジオ番組を移動の際の運転中に頻繁に聴いている。そのためか、日本語学習に、あれば役立つ媒体としてもＣＤを挙げている。 3）考察 N·Tは地域に溶けこみ非常に安定した生活を送っている。飲食店が、人間関係を築きそれを維持するのに一つの役割を担う交流の場になっていると推察される。友人等を店に招くことができ、またN·Tと関わりを持った人が店を訪れることにより彼女と接することを容易にしているからである。飲食店経営者、大学で学ぶ学生という顔の他に、三児の母親、ＰＴＡ、少年サッカー・チームのコーチ、警察や裁判所の通訳ボランティア、沖縄と自国の友好協会会員、自国料理の講師と多様な役割を担い、多様なコミュニティと関わっている。コミュニティ活動、仕事、勉強にとさまざまな活動を通して独自のネットワークを築いていることがわかった。環境が自然にネットワークを構築しているのではなく、N·Tが積極的に社会と関わりを持つよう努力しているからである。彼女自身がコミュニティのキーパーソンとしての役割を担っているのではないだろうか。
no.009 M・O （女）	1）対人環境について M·Oは、以前通っていた日本語学校のアシスタントの女子学生２人と良い友人関係を築いている。自宅で共に食事をしたりメールを交換したりす

	る仲で、家族、学校、仕事のことまでさまざまな話をする。彼女達はレポートを手伝ってくれたり、日本語の知識や日本の文化や習慣についてもいろいろ教えてくれたりする。知識が増えると同時に心の支にもなっていると感じている。また、日本語学校でのクラスメートや大学の留学生等とも親しくしているが、日本語の上達という意味では、外国人同志なのであまり関係ないようであるが心の支えになっていると感じている。また、日本人と結婚している同国人の友人３人とも月一回程度同国人の会で会う。100％母国語で話すが、彼女達は日本の文化や習慣について教えてくれるので知識が増えるし、沖縄での生活に関するアドバイスがもらえるので、心の支えになっているということであった。 ２）非対人環境 字幕スーパー付きのテレビ番組は、聴き取れなくても読めばわかり漢字力も増えると考えていて、特にドラマは、日本人の生活や習慣が視覚情報として入ってくるのでわかりやすく知識が増えると感じている。大学の教科書には未知のことばもたくさんあり、難しいと感じている。また、子供に読み聞かせをすることや保育園からのお知らせを読むことなどで知識が増えるとも述べているが、母国語と日本語の辞書で適切なものがないので不便だとも感じている。 ３）考察 家庭内外で日本語が主言語となっているM･Oにとって、日本語や日本文化に関わる知識の獲得という点でも、また、心の支えとしても、まず家族があり、大学内外の日本人や外国人、そして同国人の友人達となっている。保育園に通う子供の親同士のネットワークや夫の親族等とのネットワークは出現しなかったことから、M･Oの対人環境は学びの場を中心としたもので、生活の全ての面において学ぶことを第一義と考えていて、友人達にも教師のような役割を求めているようであった。
no.010 Q・C （男）	１）対人環境について Q･Cは、国で空手修行を積み、武士道精神を知り日本文化に傾倒するようになった。Q･Cの価値基準を反映するかのように５人中４人が外国人の

ことをよく理解している年上の日本人であり、日本の文化や習慣を教え相談相手になっている。１人のみがQ･Cとは異なる国の外国人であるが、日本語が自分より上だと尊敬していて、楽しい時間を共に過ごしながら留学生活に関する相談もできるとしている。また、大学内の留学生の組織である学友会の会長として活躍しているため、いろいろな国の留学生や日本人学生との付き合いも幅広い。さらに、帰国を思いととどまらせたガールフレンドは、毎日日本語で大学の授業のこと、悩み事、日本語に関してわからないこと等全て話せ、精神的にも大きな支えになっている。

２）非対人環境

Q･Cは毎日食事中にお笑い、時代劇（新撰組）、ニュース番組等を見ている。特にＮＨＫでは歴史的な番組、日露戦争、自衛隊等のような史実に基づいた番組が放映されるので、日本文化や日本の様子が画面を通してよく理解できると述べている。テレビの利点は内容がわかりやすい上に、いろいろな人の話が聞けるため聴く力も上達すると感じていて、定期購読をしている新聞では、時事問題、歴史、スポーツ記事等を読むため、漢字の勉強にもなり読解力も付くと感じている。辞書は、学習者Q･Cにとっては一番大切なもので、わからないことばや表現を調べる時に毎回使用している。辞書の説明を読むことやたくさんの例文を読むことは、漢字の勉強にもなり、表現力も付き作文やスピーチの原稿を書く時にも役立つと述べていた。

３）考察

調査を通して、Q･Cは武士道精神を重んじ、日本文化を愛し、日本を大切に思っていることがわかった。日本や沖縄の歴史にも興味を持っており、積極的に本を読んだり、ビデオを借りたり、ＮＨＫで放送されたものを録画して見たりしている。私費留学生という立場上、大学の授業の合間にアルバイトをしているにもかかわらず、授業には欠かさず出て、さらに人々との交流を忘れない。日本人の考え方や精神を学ぶためには、日本語を完璧にしたいという強い意志を持ち、現在日本語学をはじめ、琉球文化や文学、方言等を幅広く学んでいる。Q･Cは、空手関係の人々、クラスメート、留学生と広範囲に交流している。このように、尊敬できる人達との繋がり

	がQ·Cの沖縄での生活を精神的に充実させているようである。
no.011 U·K (男)	1）対人環境 U·Kは、仕事や学業について励まし合いながら、共に頑張っている日本人の恋人の存在をはじめ、恵まれた対人関係のネットワークに支えられ、安定した留学生活を送っている。大学には、毎朝、一緒に通学し（車で迎えに来てくれる）、日本人だと意識しないほど自然体で付き合える友人がいる。東京在住の同世代の男性とは、母国へ交換留学生として訪れた際、ホーム・ステイ先を引き受けたのが縁で、今でも家族ぐるみの付き合いが続いている。親友であり、日本語の先生でもあるというほど、彼から受けた影響は大きいようである。さらに、住居先のアパートには、他大学へ通う留学生の友人がいる。彼とは毎晩、就寝時には、壁を叩いて合図し合うほどで、心の支えとなっている。また、同じアパートに住む同国人で、兄のように頼れる男性もいる。いろいろな相談をしたり、車を貸してもらったりと、プライベートな部分でサポートしてくれる重要な存在だということである。 2）非対人環境 テレビ視聴については、文化の違いについて興味があるので、バラエティ番組は嫌いだが、文化の違いを知ることには役に立つ事もあるから視聴するという程度の消極的な活用にとどまっている。また、新聞は、母国でも読む習慣がなかったので、現在も読んでおらず漢字力に自信がないためか、雑誌も読んでいないということであった。その他の日本語教材については、時間に余裕のある時には、日本語能力試験の問題集で学ぶこともあるが、今は大学の勉強が忙しいので、何も使用していないということであった。 3）考察 来日前から家族ぐるみで交流している日本人家族や日本人の恋人の存在が、U·Kの留学生活を支えていることがわかった。その他にもアパートの隣人や同国人の先輩、大学の友人等、対人関係に恵まれていることが、U·Kの精神的な安定に繋がっていようである。落ち着いた環境が日本語学習や留学生活にどれほど重要な要因であるのかを改めて認識させられた。

4.2　対人環境の特徴

4.2.1日本語を学ぶために役立つもの

「日本語を学ぶために役立つもの」として、図１のような結果が得られた。

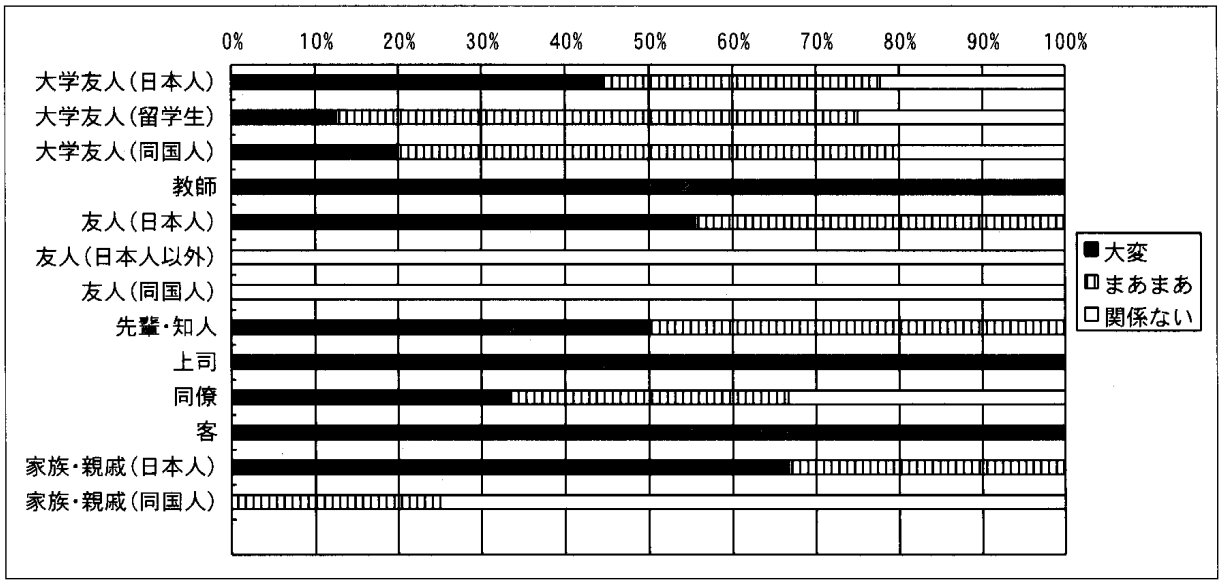

図１　日本語を学ぶために役立つもの（対人環境）

「大変役立つ」と考えられている対象として、大学の日本人の友人、チューター、教師が大部分を占め、祖母（日本人女性）を挙げた学習者が１人だけいた。次に、仕事やアルバイト先の上司、同僚、客と続く。このことから、学習者の日本語学習における、受け入れ側の大学や日本社会等、身近な日本人に対する学習者の期待の大きさ、あるいは依存の高さが改めて認識された。

「まあまあ役立つ」と考えられている対象として、多くの学習者が、大学の中で、日本人以外の同国人の友人、留学生の友人と簡単な交流をする程度の日本人の友人グループを挙げている。大学では、外国人留学生同士、助け合って日本語学習を行っているようである。次に、家族や大学以外の友人が続く。仕事先の関係者を挙げた学習者はわずかだった。

「関係ない」と考えられている対象として、多くの学習者が、友人、家族、親戚等の同国人か同国人ではない人物を挙げている。日本人のゼミ仲間を挙げている学習者がいるが、これは、卒論のために週１回集まって日本語で話すが、学習者の質問に対してはすぐに「わからない」と答えてしまうため、日本語学習にとって関係ない存在だと考えているようである。その他にも、大学の日本人の友人を挙げた学習者がいるが、これは、学習者の日本語力が高く、日本語を学ぶという意識をせずに付き合っているということが考えられる。

4.2.2日本文化を学ぶために役立つもの

「日本文化を学ぶために役立つもの」として、図2のような結果が得られた。

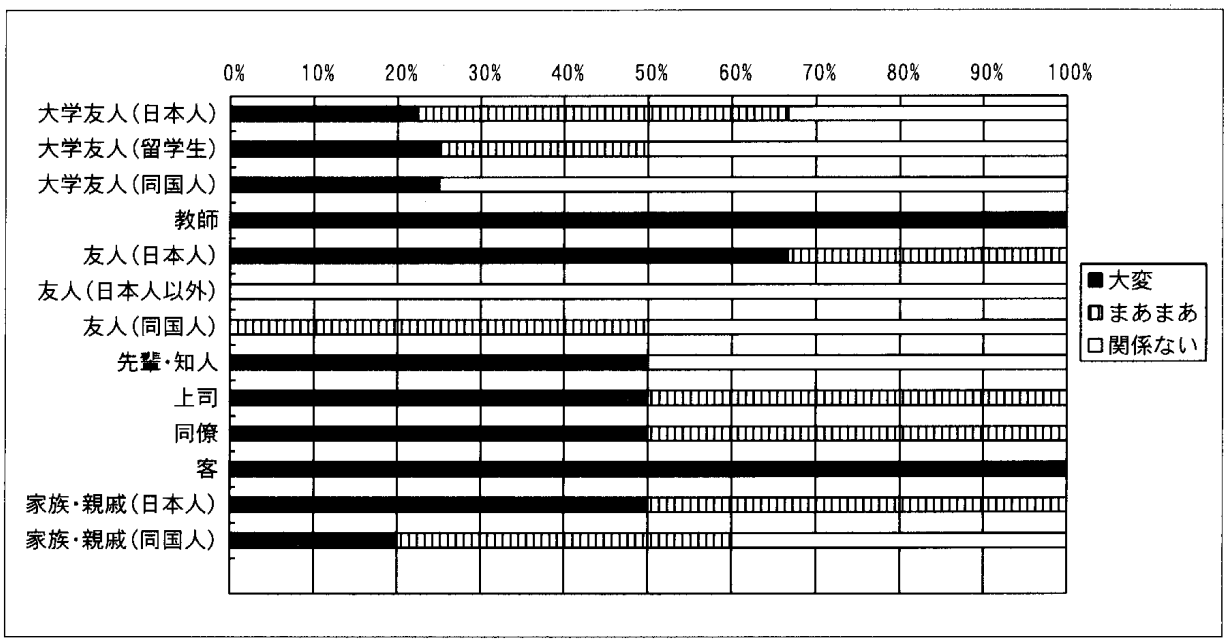

図2　日本文化を学ぶために役立つもの(対人環境)

「大変役立つ」と考えられている対象には、それぞれの学習者にとって、質問しやすく、情報提供をしてくれる等の面倒見のよい人物が挙げられているようである。学習者によって、対象者は多岐に渡っており、内訳は、チューター的な友人、日本語教師、卒論指導教員、家族や同居している友人、仕事先の関係者となっている。

「まあまあ役立つ」と考えられている対象として、大学の日本人の友人を挙げた学習者が多い。これは、会話の中に文化についての話題が上らないことが理由のようである。また、同国人ではない友人を挙げた学習者もいるが、これは、来日経験年数等の差と関わっている可能性がある。

「関係ない」と考えられている対象として、多くの学習者が、日本人以外の友人を挙げている。他に、大学の留学生の友人や同国人の友人が挙がっている。大学の日本人の友人を挙げた学習者は、日本文化が学べるという意識なく、自然な付き合いをしているということであった。また、日本人の知人を挙げたのは、交流頻度が低いことによると思われる。

4.2.3心理的な支えになるもの

「心理的な支えになるもの」として、図3のような結果が得られた。

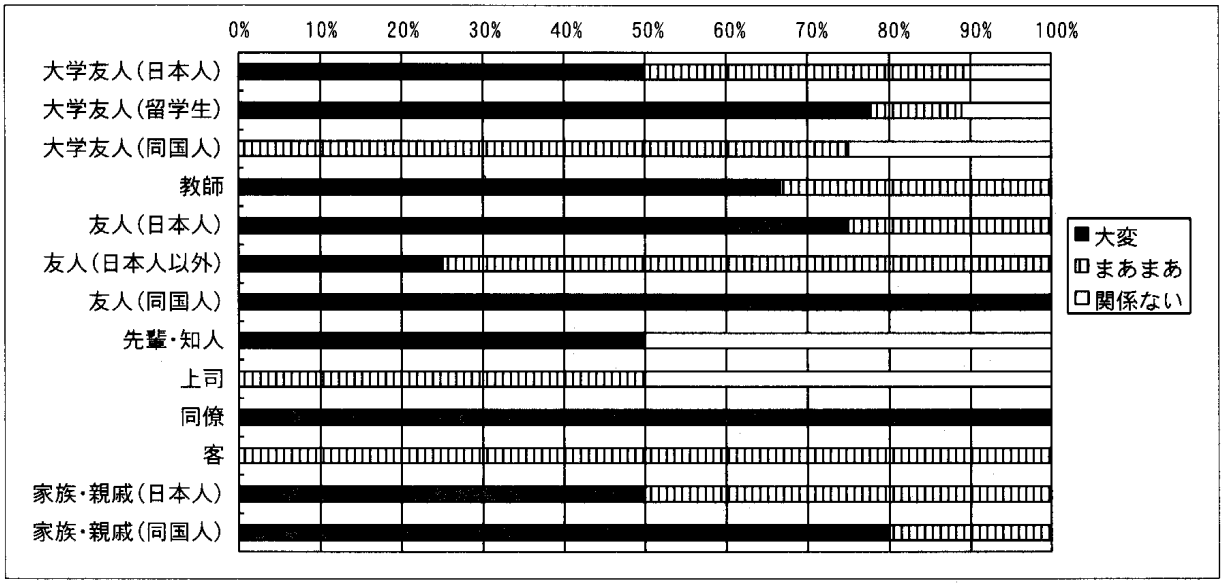

図3　心理的な支えになるもの（対人環境）

「大変役立つ」と考えている対象として、多くの学習者が、同国人、あるいは同国人ではない友人や家族を挙げている。日本人として挙げられているのは、チューター的な友人と日本語教師である。学習者の心理的な支えとなるには、ことばが通じること、あるいは、共感し合えることが大きなポイントになっているようである。このことは、学習者支援の立場にある者にとって、重要な示唆となるだろう。

「まあまあ役立つ」と考えている対象としては、日本人と同国人、あるいは同国人ではない人物が挙げられている。日本人の内訳は、簡単な交流をする程度の日本人の友人や、卒論指導教員、大学以外の友人となっている。同国人、あるいは同国人でない人物の内訳は、居住を共にする仕事仲間、親戚、ボーイフレンドとなっている。理由として、リラックスできることが共通に挙げられていることは、興味深い。

「関係ない」と考えられている対象は、日本人の友人、先輩、日本人の知人と少数であった。このことから、いかに友人や家族が学習者の心理的な支えとなっているかということがうかがえる。

4.2.4　対人環境のまとめ

学習者のほとんどが、「日本語学習」、「日本文化の習得」、「心理的な支え」のいずれについても、対人関係の重要性や必要性を挙げている。つまり、学習者は、さまざまな対人関係の中でインターアクションを起こすことにより、多くの学習の機会や精神的な安定を得ているということだろう。留学生活を支える対人環境の重要性が改めて認識された。

調査の結果、この１か月の間によく接している人として挙がったのは、「大学の日本人の友人、大学の留学生の友人、大学の同国人の友人、教師、日本人の友人、日本人以外の友人、同国人の友人、先輩・知人[3]、上司、同僚、客、日本人の家族・親戚、同国人の家族・親戚」の13種であった。その中で、「大学の日本人の友人、日本人の友人、教師」について、多くの学習者が、「日本語学習」、「日本文化の習得」そして「心理的な支え」のいずれについても大変役立つと回答している。学習者が、キャンパスやプライベートな生活において、日本語学習を支えてくれる存在を頼りにしていることがうかがえる。また、「大学の留学生の友人、大学の同国人の友人」も、「日本語学習」、「心理的な支え」に役立つと回答している。このことは岡（文野　2004：33）の、心の支えになる人物は「同じ境遇にある」という理由からわかり合える存在だという報告の結果と一致する。今回の調査でも、「励まし合える」、「安心する」、「わかり合える」等のコメントの他、同じ留学生（あるは同国人）が、日本語ができることについて、「尊敬できる」、「目標になる」というコメントがあった。「同国人の家族や日本人以外の友人」については、「日本語学習」や「日本文化の習得」とは「関係ない」が、「心の支え」に「大変なる」という回答が多く見られた。

今回の調査では、学習者の多くが「日本語の学習に最も役立っているもの」として、「日本人と話すこと」等、対人環境を重視しているような回答が得られた。さらに、「日本語学習のために必要な人」として、「親友、日本人の友人、先生、心が通じ合える人等」という回答があった。そして、日本語学習に最も役立っているのは「そのような人達と話すことや仕事を共にすること」だとしている。「日本の文化や習慣を知るのに一番役に立つもの」として、「実際に行事等に参加して感じること、学校の授業、サークル活動、趣味の付きあい、仕事」等が挙がっているが、それらについてもやはり、対人関係の中でインターアクションを起こすことで、学習者に学びのチャンスがもたらされているということだろう。

「日本の文化や習慣を知るのに必要な人、役に立つと思うもの」として、「日本人の友人、親友、家族、日本人の彼氏」という回答が見られた。「日本にいるときの心の支えとして一番大きいもの」としては、「故郷の家族」が一番に挙がっており、つづいて「友人達、ルームメート、沖縄にいる家族」という回答があった。その中で１人だけが家族と同居しているにも拘らず、心の支えは「自分の頑張り」だと回答した学習者もいた。「日本にいる時心の支えとして必要な人、役に立つと思うもの」として、「恋人、家族、心から信頼できる友人」への期待が非常に高い。また、「自分自身の目標や頑張り」という回答もあったが、自分の頑張りだけが心の支えとして一番大きいと回答した学習者でも、「何

でも言える人がいたら…」とコメントしていることから、家族への責任感や大学での勉学の重圧が軽減できるような心の支えを対人関係に求めていることがうかがえる。

以上のことに加えて、対人環境を地域や滞在年数の視点から見てみると、以下の２点が見えてきた。

＜地域との関わり＞

ほとんどの学習者に共通していることは、それぞれ程度の差はあるが、仕事や趣味、友人、ホーム・ステイの経験、子供の教育や地域活動、近所・親戚付き合い等を介して、地域との関わりを持っている。このことは、学習者が広がりのある、あるいは、これから広がりのある対人関係を築いていく基盤を持っているということである。また、これからの対人環境の変容が予測される点でもある。特に、N·Tのように滞在年数が長く、家族で飲食店を経営していると、さらに地域との繋がりが緊密で大切なものとなっている様子がうかがえた。しかし、11人中１人のみが、生活をしていくためにゆとりがなく、地域との関わりが希薄な学習者もいた。

その１人の学習者を除く他の学習者は、沖縄の文化・歴史を学びたいと積極的に考えている。そして、空手を習うことによって沖縄の環境を有効利用している者や沖縄はアジアだと感じていて故郷にいるように住みやすいと感じてもいる者もいるが、一方では、外国人に無理解な人に対しては批判的に見ている者もいる。沖縄方言に関しては学ぶ必要性を感じていない者も１人いるが、残りはある程度学びたいとしている。沖縄方言を自然に習得し、方言語彙を地域に溶け込むための一つのストラテジーとして臨機応変に用いている者もいる。学習者は、概して、沖縄に居住していることに関してプラスに捉えていると言えよう。

＜滞在年数と対人環境の広がり＞

学習者11人のうち３人が既婚者であるが、その３人も滞日年数によって対人環境は大きく異なる。16年の滞日年数を持つN·Tは、家族としての経済的な自立、子供の教育、そして地域社会に根を下ろし、さらなる自己実現に向かって大学で学ぶことを実行するバイタリティに溢れ、対人関係の輪が幾重にも広がっている。しかし、滞在年数３年のM·Oにとっては、地域社会に根を下ろすという状況にはまだ遠く、環境への適応、そして目標言語の習得のある段階にいる。滞日年数によって、ネットワークの広がりの差や対人関係の濃淡が出てくることは予測されたことではあるが、今回の調査でもそのことが確認された。

しかし、独身者のうち、滞日年数６ヶ月のU·Kの精神面の安定ぶりとネットワークの広がりは、滞日年数の長短だけが必ずしも対人環境が広がる要因ではないことも示している。短い滞在期間であっても、意欲的で明確な目標を持つU·Kの場合は、東京の日本人家族は

もとより、パートナーの存在（信頼感に満ちた肯定的対人関係）から広がる対人環境の幅が大きい。このことから、滞在年数と対人環境の広がりの関係は、滞在年数だけが環境の広がりの要因ではなく、外的要因・内的要因が緊密に絡み、一つひとつのケースによって状況が異なると言えよう。

4.3 非対人環境の特徴

4.3.1 日本語を学ぶために役立つもの

「日本語を学ぶために役立つもの」として、ほとんどの学習者が「大変」、「まあまあ」と答えたものは、テレビである（図４）。見る番組は、「ニュース」が一番多く、次いで「ドラマ、バラエティ、映画、時代劇、天気予報、クイズ番組」となっている。また、ＮＨＫの教育番組を見ている学生が11人中５人もいた。その中の１人は、ＮＨＫのテレビ放送には大きな信頼を寄せていて、それらの文章や用語の正確さを高く評価している。

テレビを見る理由としては、「聴く力がつく」、「情報がたくさん入る」、「いろいろな地域のことばに触れられる」、「流行していることばがすぐわかる」、「日本文化に関する知識が増え、理解が深まる」、「日本人の生活習慣がわかる」等であった。また、日本のテレビは画面の下に字幕スーパーが出て、聴くだけでなく文字の勉強や理解の助けにもなっているようである。

頻度としては、「毎日」と答えた学生が多く、「週３～４回」、「週２～３回」という結果から見ると、毎日の生活の中では、一番身近なものとしてまた必要なものとして存在している。このように、好きな時に、好きな番組を、好きな時間だけ、自分自身で選択できるという点ではテレビは学習者にとって一番有用なものだと考えられる。

次に新聞、雑誌が挙がっている。新聞記事の内容としては「大きな事件や事故、時事問題、歴史、スポーツ」等である。新聞では文章を読むことによって日本語の力が付く上、漢字の勉強にもなり読解力も付くと考えているようである。

また、ほとんどの学習者が利用しているものに「インターネット」がある。入手したい情報を得、大学の授業のためのレポート作成、スピーチの題材等に役立てている。それに母国のニュースを見たり、メールのやり取りのために使用できるので活用しているようである。

その他に、「辞書、電子辞書」を挙げている学習者がおり、わからないことばや表現を調べる時に使用し、その利点として「説明が詳しい」、「用例がたくさんある」、「語彙・表現力が豊かになる」等が挙げられている。特に、作文やスピーチの原稿を書く時には役立つようである。

教科書や月刊誌『日本語ジャーナル』に付いているＣＤを聴いて会話や聴解を上達させるのに役立てている学習者もいる。また、日本の音楽を聞くことによって日本語力を高めたり、日本文化や習慣について知識を増やしたりできると答えている一方で、自国の音楽や伝統的な音楽を聞くことは心の支えになっている。ＣＤの利点は、通学の車の中や家事をしながら聞くことができるという点である。忙しくて日本語の勉強に十分な時間が取れない学習者は、このような「ながら学習」でＣＤを利用している。

月に一回程度、カラオケに行き、日本のポップスを中心に歌っている学習者もいて、歌詞を見ながら歌うため、漢字の勉強になっていると述べている。

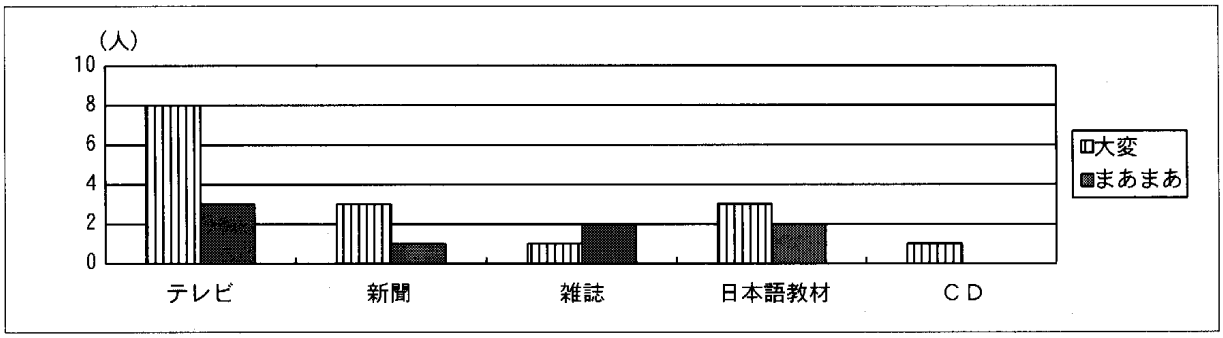

図４　日本語を学ぶために役立つもの（非対人環境）

4.3.2 日本文化を学ぶために役立つもの

「日本文化を学ぶために役立つもの」では、テレビ視聴が日本文化や習慣を知るのに一番良い方法であると答えた学生が多い（図５）。「歴史的な番組、戦争、自衛隊等について紹介されていた番組はテレビの画面を通して、よりリアルに印象付けられた」、「歌舞伎や落語を見ることによって、日本の伝統的な文化にも触れることができた」、「母国との文化の相違を知ることができる」等と述べている。テレビドラマの中でも特に、恋愛ドラマに興味を持っていて、「日本の社会事情」、「日本の文化」、「日本の家族」、「日本人の行動様式」等が良くわかるという回答がみられた。日本は料理番組が多く、そのことから日本人は食べることに関心を持っていることが理解できたり、テレビを通して若者の服装やヘアスタイル等の好みを知ることができたりするので、日本に関するいろいろな情報が得られるとしている学習者もいた。

新聞は、事件やニュース等が掲載されているので、役立つようだ。特に地域のニュースでは沖縄のことも学べ、新聞についてくる「折り込み広告」では、食品に関するスーパーの安売り情報が入手できる上、季節のもの（例えば、ひなまつり、節分、お中元等）が紹介されていて日本文化についての知識が増えると述べている。雑誌の場合で、特に写真が

付いていると、日本の文化がよくわかると答えている。

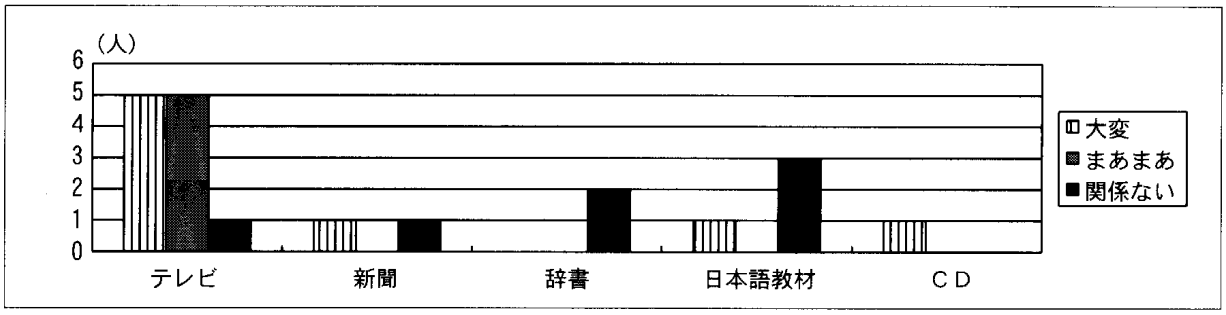

図5　日本文化を学ぶために役立つもの（非対人環境）

4.3.3 心の支えになるもの

「心理的な支えになるもの」として「テレビ」が最も多く挙げられている。その理由は見ることによってストレスを発散させることができ、日本語学習や日本文化への知識が増えるという満足感からである。テレビは心と心を開いて話し合う相手ではなく、一方的に情報を与えてくれるものであるため、本当に悩みがあった時には、心の支えになるとは考えていない学習者もいた。しかし、家にいる時はつけっ放しにしておく学習者、寂しいから起きたらすぐにテレビのスイッチを入れる学習者、眠れない時に役立つと答えた学習者もいた。

4.3.4 非対人環境のまとめ

今回の調査の結果、非対人環境として活用している物的リソースには、「テレビ、新聞、雑誌、辞書や電子辞書、CD、日本語の教科書、インターネット、ラジオ、カラオケ」等、多種多様であった。その中でもテレビに関しては学習者のほとんどが「毎日」あるいは「週に2～4回」と多く活用しているようである。先行研究でも触れたが、林（2004：39）が「中級者はテレビを意識的に日本語学習の道具として捉えている人が多い」と述べているように、本調査の結果でも、テレビは「聴解力がつく」、「語彙力がつく」、「情報をたくさん得ることができる」、「日本の文化や習慣についての知識が増える」等、「日本語学習のために大変役立つ」と答えている学習者が多かった。このことは林（前掲）の「日本語のインプットを豊富に得て日本語力を高め、社会参加の可能性が見えてくると、さらに日本語を習得しようと努力することに向かう」という結果と一致していた。つまり、日本語学習や日本の社会生活に溶け込むために、テレビは重要な役割を担っていると言えよう。しかも初級の学習者に比べて中級の学習者にとって、テレビの重要度は増している。

また、浜田（2004：17）も林（前掲）と同様に「日本語学習環境が『教育領域』から

『交友領域』『日常生活領域』へ、つまりより身近でより多様な領域へ広まっていることが、運用能力の向上と関連している」と述べている。林の言う「社会参加」と浜田の述べる「日常生活領域」という視点から見ると、テレビを見るという行為によって共通の話題ができ、それによって交友領域を広げ、社会参加を行うということが、今回の調査でも確認された。テレビは、「日本文化を学ぶために役立つもの」としても、学習者は意識していて、テレビ番組はあらゆる分野における行動様式に間接的に触れることができる。また、感情移入が容易にできるため日本人になり社会参加をしているような錯覚を持つことも否定できないが、「心の支えになるもの」としてもテレビは一番に挙げられている。「ストレス解消」、「知識が増えたという満足感」、「国のことを知ることができる安心感」、「寂しさをまぎらわすもの」、「眠れない時に安らぐもの」等と生活に欠かせないもののようである。ここで見てきたように、テレビは日常生活領域を最も大きく占めていることがわかった。

また、本調査では浜田（前掲）の述べる日常領域というのは、テレビ以外に「辞書や電子辞書」や「教科書」等教室環境に関係するものから、インターネットを利用したり、Eメールによって交流したりする学習者がいることから、多様であることがわかった。さらに新聞の「折り込みチラシ」を参考に食品の安売りの情報を得たり、行事を知ったりする学習者もいる。このような多様なリソースを用いて日本社会へ参加していると言えよう。

これらのリソースは、主に日本語学習のためのインプットという側面を持っているが、インプットのみにとどまらず交友関係、及び社会参加のためのアウトプットにも繋がっていることがうかがえた。

以上のことから、学習者11人全員が、教室場面での日本語のFormal Instructionを受けている状況にあり、また、その中の１人を除く全員が、日本語の自然習得の機会も広く多様であると言えよう。教師管理による教室場面でのFormal Instructionを自らが希望して受けており、メディアやネットワークの活用等、学習者自らが学習環境を管理している様子も見えてくることから、自律的な学習者であると言えよう。そして、それに加えて意識的な管理者が存在しないと言われる自然習得の機会（宮崎：2005）をも積極的に捉え活用しながら、自己実現を図ろうとしている。このことから、自然習得にも二通りあり、意識的な管理者がいない場合と、自らがある程度意識して管理者となり自然習得している場合があるということが言えそうである。10人の学習者は、教室学習・自然習得の両方の場面においてそれぞれに意識的に習得している面と自然に習得している面とがあり、その中で自律的に非対人環境を活用していると言えよう。

5．分析と考察

5.1 学習環境と学習者の相互作用

ここでは、調査結果から見えてきた「学習環境と学習者の特性」、「安心して学習できるということ」、「学習の核」の３つの視点から学習環境と学習者の相互作用を見ていく。

5.1.1 学習環境と学習者の特性

当然予測されたことではあるが学習者には個別の学習環境があることが調査結果から確認された。その学習環境は、①対人環境、②非対人環境、そしてそれらを包む③包括的環境から成り立ち、学習者自身と相互補完的に作用していることがわかった。そして、学習者によって①～③のセグメントの幅・広がり・重なりが異なり、二つと同じ環境を持つ学習者はいないこともわかった。その異なりは、学習者自身の価値基準や規範による選択、時間的・経済的・心理的要因による選択、そして、偶然の選択等によって独自に構築されていることが考えられ、それらが学習者の特性を形作るものになっている。

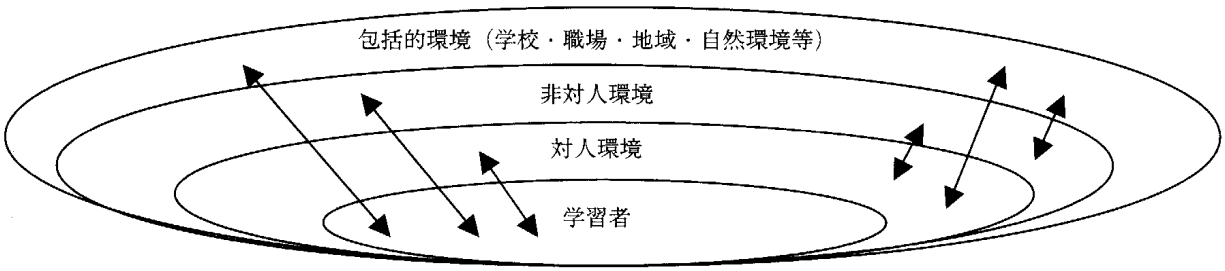

図６　学習環境の広がり

学習者の個別性を象っている学習環境の広がり（図６）を捉えることによって、改めて、日本語学習は学校や教室の中だけで起こるものではなく、教室外の日常生活空間を含めた環境全体の中で起こるものであるということ、そして教室外学習環境の比重が大きいものであることが再認識された。学習者は、学習者自身の価値基準や規範、言い換えれば、学習者自身のビリーフや学習スタイル、そして学習ストラテジー等の形成と変容、そして環境の評価とアセスメントを繰り返しながら、図６のような環境の中で、日本語を学習し日本文化に関する知識を得ている。また、学習者一人ひとりの特性は、このような包括的環境の中で、それぞれのセグメント間での相互作用を繰り返すことによって、形成されていくのではないかと推察された。そして、その相互作用は決して一方向のものではなく、双方向の作用がいくつも同時に繰り返しながら変化する総合的プロセスであり、時間の経過、学習者の発達の段階、目標の変化や能力の変化、そして、規範や価値観の変化等と共に、

変容していくことが考えられた。

5.1.2 安心して学習できるということ

11人という限られた人数ではあるが、その学習環境を俯瞰すると、対人環境に関する肯定的な捉え方が、安定した学習に繋がっていることが見えてきた。そして、日本語学習や日本文化の知識獲得に役立ち、心の支えにもなるような対人環境を持つ学習者は、時間的・経済的・精神的に比較的安定した状況にあるということも見えてきた。逆に、時間的・経済的・精神的なゆとりのない学習者は、対人に割かれる時間をデメリットと考えているコメントがしばしば見られた。対人環境に関して肯定的な捉え方をしている学習者と、そうでない学習者の学習環境を比較し図７に示しているが[4]、環境の広がりや接触の濃度、そしてバランスという側面において異なっていることがわかる。

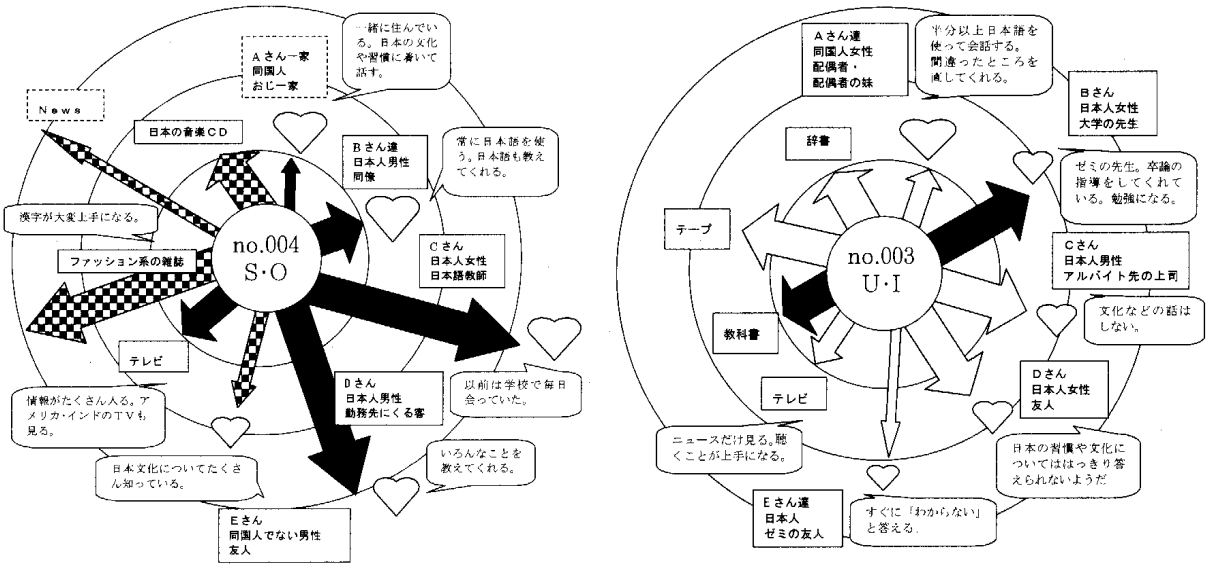

図７　対人環境を肯定的に捉えている学習者（左）とそうでない学習者（右）の学習環境
（文野　2004）

11人中６人が家族や友人と同居し比較的安定した生活を送っていて、その６人は対人・非対人環境を積極的に捉えている者が多い。しかし、家族と同居していても、必ずしも環境を積極的に捉えていない学習者もいることがわかった。家族と同居はしているものの、経済的な基盤がなく学習者が家族への責任を一人で背負っている場合がそれである。非対人環境への関心は具体的に示しているが、重くのしかかる責任からか、対人環境は学習意欲へは繋がっていないとしている。つまり、経済的基盤がしっかりしている家族と同居している者や、知識獲得の好機になっていると捉えている者、やりがいのある仕事を持って

いる者、そして目標をしっかり持っている者は、対人環境を肯定的に捉えていて、そうでない者は否定的な捉え方をしていることがわかった。

このことから、議論の余地はあろうが、マズローの「欲求の5段階ピラミッド説」の基層になっている「生理的・生命の欲求（physiological needs）」や「安全・安定の欲求（safety needs）」、つまり衣食住等の根源的な欲求が満たされてなければ、「親和・所属の欲求（love & belonging needs）」の段階、つまり他人と関わりたいという欲求やネットワークを築くことを実践に移すところまで進まないということが明らかになった。このことから、さらに上層部の欲求である「自我・自己尊厳の欲求（self esteem needs）」や「自己実現の欲求（self-actualization）」の実現に向けて環境を自律的に構築するには困難が伴うことが推察された。ということは、生存に関わる環境がある程度整っていなければ、対人・非対人関係を構築しながら学習環境を整え、自己実現に向けて自律的に必要な選択をしながら進んでいくというプロセスを辿るのは難しいということであろう。このことは、何も日本語学習者に限ったことではなく人間共通のプロセスだと考えられるが、異文化に一から適応しなければならない学習者にとって、多くの困難を伴うプロセスだと言えよう。ということは、学習者も学習者である前に一人の人間であり、自律的な学習を実践していくための環境の構築には、まず、存在の根源的な部分で安心できる状態を築く必要があることは言うまでもないことである。

5.1.3 学習の核となっているもの

守谷（2004）は日本語学習成果に関する帰属要因調査で、日本語学習の成功・失敗の要因は、学習者の外的要因（総合的研修環境要因）ならびに内的要因（情意要因）と強く関連していることを明らかにしている。守谷が「外的要因」の中で、学習の成功・失敗に大きく影響しているとした「日本語使用機会の多少」、「日本語学習以外の優先事項の存在・不存在」、「周囲の母語話者の数」、「自分の日本語力に対する相手からの理解・配慮の有無」、「周囲の人からのさまざまな機会提供や個人指導等の有無」、「自分に対する周囲の関心の有無」、「職場等での交流を通しての知識獲得の有無」等の総合的環境要因が、本調査でも確認された。

内的要因（情意要因）は、H. Douglas Brown（1980：100）が「情意的領域を明確に説明することは不可能である。第二言語習得における情意面には、圧倒的な数の要因が存在するからである（筆者訳）」と述べたように、非常に複雑なものであることは言うまでもない。しかし、本調査の範囲でわかった内的要因で、学習の核となっているものは、多少の個人差はあろうが、ゆるぎのない「信頼感に満ちた肯定的対人環境による心の支え」の

存在、「学習者自身の目標や意欲、価値観や規範」、そして、「時間的・経済的・精神的適度なゆとり」の三点であった。「信頼感に満ちた肯定的対人環境による心の支え」の「対人環境」は内的要因にもなれば外的要因ともなり、内・外的要因を明確に区別することは困難であるが、図8のような核を中心として図6のような環境の広がりが形成されていくのではないかと推察された。

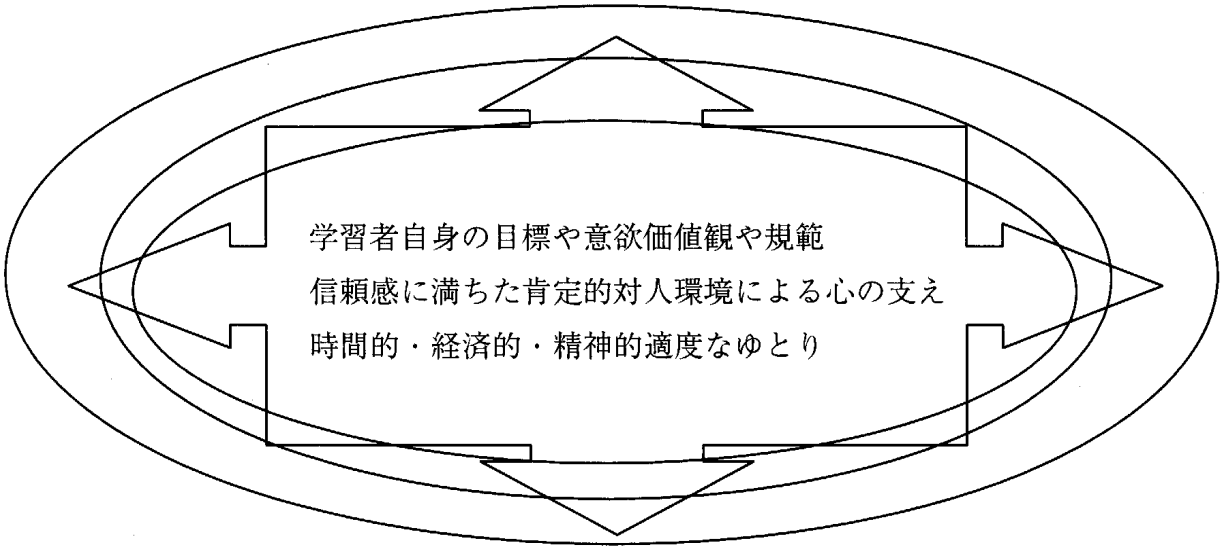

図8　学習環境の核となっているもの

5.2 変容

調査を実施することで、「学習者側」と「調査者側」双方に変容が見られた。変容というのは、ここでは調査を実施することで、学習者と調査者側に、行動、あるいは、心理的に何らかの変化が認められたことを指す。具体的には、学習者側の変容というのは、調査中に観測されたこと、本人が述べたこと、調査後に調査者の観察で認められたこと、そして、今後の変容が予測されること等に関わる変容である。また、調査者側の変容というのは、調査中、あるいは調査後に、気づきや認識を新たにしたこと等を指している。以下に学習者側と調査者側に起こった変容について具体的に述べる。

5.2.1 学習者側に起こった変容

（1）振り返りと評価

調査者に問われるままに話すことによって、学習者は自分を意識的に見つめ直す機会に、また、帰国直前の学習者にとっては留学生活を振り返る機会になったようである。さらに、周りの大切な人やものについて一つひとつ語ったことは、学習者自身が来日以来経験して

きた異文化への適応過程を話したことにもなり、自己変容のプロセスを客観的に再評価する機会になったのではないかと思われる。

（2）自己実現へのステップ

聞く耳を持った調査者と向い自分を語り、振り返りや評価をすることで、学習者は自分を取り巻く学習環境の中の自分自身の位置を意識したことであろう。そのことが、今後、環境の中での自分の位置のバランスを取ることに繋がり、自己実現に向けて次なるステップに向かう一つの契機になったのではないかと思われた。

（3）関係性の変化

調査前には、調査者が教師でもあることから学習者と調査者の間にはパワーリレーションの関係が存在していたと思われるが、調査を続行していくうちに、その関係に少し変化が起きたように感じられた。「時間」、「空間」、「感情」等を共有しながら生き生きとしたやりとりの中で、学習者は、教師が個という単位の学習者をありのままに受け入れ認めていると感じたのではなかっただろうか。

調査終了後に、学習者が英語のスピーチコンテストや日本語のスピーチコンテストに挑戦したい等と、研究室を訪ねてくる回数も増えたという報告があった。また、学内の留学生学友会の役員を引き受け、積極的に大学や学友達と関わっていこうとする意志が固まったという報告もあった。学習者は調査者の中に「聞く耳」、「自分に対する関心」、「支援者」等を見たのではないだろうか。受け入れられたという喜びは、新たな関係性の芽生えの予感をもたらし、学習者自身のエンパワーメントにも繋がっていくかもしれないという期待感をもたらした。

5.2.2 調査者側に起こった変容

（1）距離の縮まりと関係性の変容

11人の学習者は率直に個人的なことを話してくれた。信頼関係がなければとうてい踏み込めなかった質問もあったが、溢れ出る言葉に躊躇は見られなかった。そのことで学習者と調査者の距離がさらに縮まったように思われる。また、長時間学習者個人に向き合い時間や空間を共有したことで、教室で学ぶ学生という存在から個となり、同じ時間軸を生きている一人の人間なのだと感じられたことが調査者側に起こった変容の一つであった。

（2）多様性から個別性へ

学習者は国籍、性別、年齢という前に、まず個人であること、そして個人の見方、考え方、経験があり、それらに基づいた環境の構築を持つ存在であることが改めて認識された。近年、日本語教育では、国籍別、職業別、言語別、性別、滞在期間別、目的別、等の輪切

りによる「多様性」が議論されてきたが、それに加え、人間一人ひとりが異なるように学習者は個別に異なりユニークであるという「個別性」の視点が加わらなければならないのではないかと思われた。そして、学習者によって、学習行動が異なるように、学習環境の在り方や相互作用の在り方は異なるということ、また、学習者一人ひとりの特性は環境との相互作用によって生み出されるものだということが認識された。一人ひとりの学習者と向き合うことによって、日々の授業だけではとうてい知り得ない留学生の状況や心理面への気づきがあり、今後の接し方、心構え、そして、支援の仕方等に関する示唆が得られた。

（3）聞く耳としての教師の役割

守谷（2004：80）が「学習者自身が学習しやすい環境を自ら切り開いていけるよう、学習者を取り巻く環境に対し働きかけを行っていくことが、動機づけの上で教師が担うべき役割となるのではないだろうか」とした点を本調査でも再認識した。さらに、守谷の、環境に対して働きかけを行うという教師の役割に加えて、教師自身が環境の一部となり（支援者の一人となり）、学習者一人ひとりにストレートに共感（エンパシー）し、ありのままに学習者を受けとめることも教師の役割なのではないかと思われた。また、「メインストリーム言説によって、自らの実感を伴った日本語を教師自身が阻害させ、萎縮させてしまっているのではないか」と三登他（2003：223）が指摘しているように、教師は「～ねばならない」と自らを抑制し続けてきたかもしれないという認識と共に、一人の人間として学習者の感じ方、心の声に耳を傾け受容することも大切なのではないかと思われた。つまり、学習者の声に耳を傾けるという役割の重要性を認識したことが、もう一つの変容である。

（4）教室の内と外を結ぶ

日本語学習は学校や教室の中だけで起こるものではなく、教室外の日常生活空間を含めた環境全体の中で起こるものであるということ、そして、教室外学習環境の比重が大きいものであることが調査から確認された。具体的な学習環境が見えてきたことで教室の中に環境を持ち込む可能性、つまり、教室外の学習環境との繋がりを意識した包括的な学習支援を行っていくことができるのではないかと思われた。そこに、「社会言語能力」や「社会文化能力」を育てる社会・文化行動教育の一環としての日本語教育（相互作用論的学習）への鍵があるのではないかと思われた（西口　2002）。「ナショナル・スタンダーズ」で言えば、Communication、Cultures、Connections、Comparisons、Communitiesの５Ｃを有機的に関連づけながら日本語教育を膨らませていくということになろう（聖田　2000）。

教室での具体的な実践として、学習者が日常生活で出会っているような問題状況を教室の中に持ち込み、それについて話し合ったり、見方が一元的になったりしていないか等の

ような議論をする、また、学習者が自発的にビジターセッション等の企画に携わり地域を教室に持ち込む等、さまざまな実践の可能性が考えられる。一二三（2002：150-152）が共生的学習という視点から指摘する「学校型日本語教育の場では、正確な理解が偏重され過ぎ、曖昧さを許容する方略が身につきにくい（略）」という点や、「相手の発話に対する評価は、会話の楽しさや意見の積極的表現を活性化する重要な発話である。（中略）単なる情報の共有から一歩深めて（中略）会話を実現させるためには信頼関係が不可欠である。そうした信頼関係が、いかに築かれるのかを研究することも必要であろう」と述べているようなことも相互作用論的学習及び日本語教育の今後の大きな課題であろう。また、「母語話者／非母語話者の友人を作る」、「ネットワークを作る」、「支援者を持つ」等の社会的ストラテジーを意識した教室内外の活動を考慮に入れて、学習支援を行うことも課題なのではないかと思われた。

N・Tは、社会的ストラテジーを有効に活用することで、より充実した学びや生活を送っているが、このような学習者の具体的な学習環境が見えてきたことで、教室外の学習環境との繋がりを意識した包括的な学習支援をしていくことの重要性が認識された。言い換えれば、「社会言語能力」、「社会文化能力」（ネウストプニー　1995）を育てるための社会・文化行動教育としての日本語教育を教師が意識することの重要性が改めて認識されたのである。

（5）シラバス・カリキュラム内容の再検討

これまで、可能な限りカリキュラムやシラバスに沿って学習事項に洩れがないように努めることが仕事であると考えられてきた。しかし、今回の調査で明らかになったような包括的環境の中で学ぶ学習者にとって、大学における学習内容そのものが狭いものでしかなかったのではないだろうかという疑問が起こった。技術や手段としての日本語だけに終始していなかっただろうか、ニーズ分析やそれを踏襲したシラバス等の管理には根本的なところで欠けている点があるのではないだろうかという疑問である。

学習者が少しでも円滑に信頼関係で結ばれたネットワークが形成できるように、包括的環境での習得場面や相互作用に関する研究やネットワーク形成及び維持に関する社会的ストラテジー形成に関する研究や実践を積み、学習者支援の方法を模索することや、教室内外が有機的に結びつくようにシラバスやカリキュラム等を見直していくことが重要になってくるのではないかと思われた。そして、学習者が自律的に選択して学んでいく個別的な教授内容を搭載したシラバス・カリキュラムも従来のそれと両立可能なのではないかと考えた。その際に、内海（2003：403）が述べる「教室で学習することが、日常のどんな場面のどんな実践で役立つのかを提示すること、学習したことを教室外で積極的に使ってみ

るように促すこと、さらにはそのような実践の場を創出すること」と「学習者が教室外で経験した事例を教室に持ち込み、教室全体の学びの契機とするという方向」の双方向からのアプローチの中で、バランスを考慮に入れて実践することから始められるのではないかと思われた。

（6）管理内・外の習得方法

教師や学習者自身が記憶ストラテジーや認知ストラテジー、そして、メタ認知ストラテジーを活用して習得を管理する言語習得法以外にも、教師や学習者自身でも意図的にコントロールできない習得が存在することが改めて認識された。それは、自然習得であり、教室外でのインターアクション場面で多く起こることが考えられるが、それは教室の中でも起こり得るものだと考える。重要なことは、宮崎（2005：18）が述べるように、「効果的な習得は、こうした教師管理、学習者管理、そして、管理者が特定できない自然習得をうまく組み合わせた連鎖を形成させることによって促進する」という点である。教師管理による習得、学習者管理による習得、そして、ネットワーキング等で派生する自然習得の存在を意識に上らせ、それらを上手に組み合わせて活用していくことで効果的な習得が生まれてくるのではないかという認識を新たにした。

6．おわりに

学習者には個別の学習環境があり、それは、①対人環境、②非対人環境、そして、それらを包括する③包括的環境から成り立ち、それらが学習者と相互的に作用し学習者の「個」という特性を形作っている。学習環境の中で学習者が最も重要だとしているものは、対人環境、つまり、「人」であった。その「人」は、信頼や尊敬ができる人でなければならない。存在の根源的な部分で安心して学習できる環境を持つことが学習の基盤であり、その核になっているのが「信頼感に満ちた肯定的対人環境による心の支え」である。それに加えて、守谷（2004）が挙げた外的要因（総合的環境要因）が、学習にプラスに影響していることが本調査からも確認された。

また、「信頼感に満ちた肯定的対人環境による心の支え」に加えて、内的要因（情意要因）である「学習者自身の目標や意欲、そして価値観や規範」等の情意要因が、相互作用を繰り返しながら、学習環境を構築していることも確認された。学習環境は、学習者の目標の変化や能力の変化、規範や価値観の変化、そして、時間的・経済的条件等の変化と共に変容することもわかった。これらのことは、学習者の外的要因並びに内的要因と学習は強く関連しているという守谷（2004）の結論を改めて支持するものとなった。

以上のことから、改めて、学習は学校や教室の中だけで起こるものではなく、教室外の

日常生活空間を含めた環境全体の中で起こるものであるということ、つまり、包括的環境の参加者とのインターアクションを通して学習が起こることが認識された。

最後に、日本語学習者のような多言語・多文化を持つ個人が、自分らしく生きられる理想的な社会を創造していくためにも、教師が教育的実践者・社会的援助者として、学習者の「多様性の認識」と同時に「個別性の認識」を持ち、教室と社会が有機的に結び付くように学習者を支援していくことが重要となろう。

注

(1) 本稿でまとめた調査資料は、文野峯子を研究代表者とする『日本語学習者と環境との相互作用に関する研究』（平成13～15年度科学研究費補助金による研究課題番号13680365）の一環として実施された調査資料（平成15年度）と、同研究グループが作成した調査票を基にして筆者らが実施した調査のデータ（平成16年度）である。

(2) インタビューの内容が「最近１ケ月を振り返って、よく話したり、よく一緒に行動したりした５人」ということであったため。

(3) 日本人以外を指す。

(4) 学習者の対人環境と非対人環境を視覚的に示した同心円図は、浜田（2004）のp.14～16に詳しい。

引用および参考文献

内海由美子（2003）「多言語・多文化共生社会の実現に向けた日本語教師の役割」宮崎里司・ヘレン・マリオット編『接触場面と日本語教育　ネウストプニーのインパクト』明治書院，397-410

岡崎眸・岡崎敏雄（2001）『日本語教育における学習の分析とデザイン言語学習過程の視点から見た日本語教育』凡人社

岡良和（2004）「『日本での生活における心の支え』の解釈をめぐって」文野峯子『日本語学習者と環境の相互作用に関する研究』科学研究補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書，33-38

小河原義朗（2004）「日本語教育の学習者環境と学習手段に関する調査研究－タイ調査報告－」『2004年日本語教育国際研究大会予稿集発表１』日本語教育学会，131-136

下平菜穂・岡部真理子・石井恵理子（2004）「学習者はどのようにリソースを活用するか－日本語を母語としない中学生のケース・スタディー」『2004年日本語教育国際研究大会予稿集発表１』日本語教育学会，137-142

高木光太郎（2003）「『学習』としての地域ネットワーキング」『異文化間教育』第18号：異文化間教育学会，60-67

富谷玲子・金城尚美・花城カリーナ（1999）「日系人子弟の言語生活・学習環境の検討―中学生を対象としたケース・スタディから―」『平成11年度日本語教育学会春季大会予

稿集』日本語教育学会,125-130
西口光一（1999）「状況的学習理論と新しい日本語教育の実践」『日本語教育』100号 日本語教育学会，7-18
西口光一（2002）「日本語教師のための状況的学習論入門」細川英雄編『ことばと文化を結ぶ日本語教育』凡人社，31-48
ネウストプニー，J.V.（1995）『新しい日本語教育のために』大修館書店
浜田麻理・林さと子・福永由佳・文野峯子・宮崎妙子（2003）「学習者と学習環境の相互作用をめぐって―学習者条件の記述―」『日本語総合シラバスの構築と教材開発指針の作成　第4巻日本語学習者・教育方法・学習活動』独立行政法人国立国語研究所，527-563
浜田麻理（2004）「学習者はどのように相互作用を行っているか」文野峯子『日本語学習者と環境の相互作用に関する研究』科学研究補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書，17-25
林さと子（2004）「非対人環境〈テレビ〉との相互作用－日本語学習と社会参加」文野峯子『日本語学習者と環境の相互作用に関する研究』科学研究補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書，39-46
林さと子（2005）「『学習環境』からみた日本語教育」『月刊言語』大修館書店，50-57
聖田京子（2000）「日本語学習者のためのナショナルスタンダーズの特徴―クラス実践を通しての考察―」『2000年度日本語教育学会春期大会予稿集』日本語教育学会，99-104
一二三朋子（2002）『接触場面における共生的学習の可能性』風間書房
藤井玲子（2002）「『ネガティヴな学習者観』に関する一考察」『日本語教育』114号：日本語教育学会，106-111
文野峯子（2004）『日本語学習者と環境の相互作用に関する研究』平成13年度～15年度科学研究補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書(課題番号13680365)
三登由利子・新矢麻紀子・中山亜紀子・浜田麻里（2003）「エンパワーメントとしての日本語教育」岡崎洋三・西口光一・山田泉編『人間主義の日本語教育』凡人社，209-226
宮崎里司（2005）「言語の自然習得とは」『日本語学』3：vol.24，6-18
宮崎妙子（2004）「『上手になる』についての一考察」文野峯子『日本語学習者と環境の相互作用に関する研究』科学研究補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書，27-32
守谷智美（2004）「日本語学習の動機づけに関する探索的研究－学習成果の原因帰属を手がかりとして－」『日本語教育』120号：日本語教育学会，73-82

山田泉（2003）「日本語教育の文脈を考える」岡崎洋三・西口光一・山田泉編著『人間主義の日本語教育』凡人社，9-43

ロッド・エリス（1996）『第二言語習得序説』（金子朝子訳）研究社出版

Brown, H. D. (1980) *Principles of language learning and teaching.* Englewood Cliffs, NJ: Prentice-hall.

Maslow, Abraham (1954) *Motivation and Personality.* Harper & Row, New York, 13

謝辞

調査票の使用と資料の使用について快諾してくださった文野峯子研究グループに感謝申し上げます。